



Title	NGOモヨ・チルドレン・センター
Author(s)	佐藤, 南帆
Citation	目で見るWHO. 2025, 93, p. 16-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102832">https://doi.org/10.18910/102832</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# NGOモヨ・チルドレン・センター



NGOモヨ・チルドレン・センター代表  
佐藤 南帆 (さとう なみほ)

自治医科大学看護学部卒業後、国立国際医療研究センター病院勤務。2019年に単身ケニアへ移住。NGOモヨ・チルドレン・センターでボランティア活動に従事。2022年代表就任。

NGOモヨ・チルドレン・センター（以下、モヨ）は、1999年にケニア政府に登録されたNGO団体で、創設者は松下照美氏です。「生まれた環境のせいで可能性を閉ざされてしまっている子ども」を対象にケニアで支援活動を続けてきました。2022年に松下氏が逝去され、現在は私、佐藤が代表を務めています。

私は、衣食住や教育、愛情に恵まれ、明日が来ることが「当たり前」だと思って育ちました。しかし、19歳の時に初めて訪れたカンボジアで、片腕のない子どもが1ドルを必死にせがんできたことや、小さな赤子を抱いた女性が「この子にオムツを買いたい」と1ドルをせがんできたことに衝撃を受けました。生

まれた環境が違うだけで、心身を傷つけられ、未来が閉ざされてしまう子どもたちがいることに強烈な違和感を覚え、生きることは「当たり前」ではないということを知りました。

そして「子ども達の無垢さは聖なるものであり、その無垢さを守ることが私の役目だ」と心に決め、ご縁あってモヨに出会いました。親に見捨てられ、路上を彷徨い、寂しそうにうつろな目を浮かべる子どもが、モヨに入居し安心しきった表情で無邪気に笑い、元気に駆け回る姿そのものが、モヨが在る意味であるとともに、私の生きがいでもあると確信しています。

しかし、モヨの活動を続ける中で「誰

も取り残されない世界なんて作れないのではないか」と絶望しそうになるほど不条理な現実に直面します。ケニアでの生活やNGO運営を通じて、現地の貧困問題を肌で感じ、子どもたちの「当たり前」が奪われていることを目の当たりにします。現地で感じる貧困問題は、主に以下の4つに分類されます。

## 1. 雇用機会の不足

ケニアでは失業率が高く、日雇い労働者が多く、安定した収入を得られない家庭が多く存在します。親が仕事に就けず、困っている母親を助けたいと子ども自ら路上に出て、物乞いをしていることも珍しくありません。

## 2. 学費の高騰・教育の質

ケニアでは初等・中等教育が無償化されていますが、実際には入学費や活動費、警備費、試験費用などがかかります。さらに、筆記用具や制服の購入などそれなりの出費が必要です。また、1クラス60人ほどの生徒に対して1人の先生が授業を担当していたり、教室や教材が不足していることが多く、教育の質が低下しています。子どもに教育を受けさせることの重要性を理解せず、家の手伝いや仕事をすることが当たり前だと思っていた保護者も多くいます。

## 3. 社会保障の欠如

ケニアでは、生活保護や医療支援などの社会保障制度が不十分です。生活保護制度がないため、健康で最低限度の生活を国が保障してくれません。また、病気や事故に直面した際には大きな出費を必要とするものの、医療費を支払うことが



施設に暮らす子どもとスタッフの集合写真



①更生施設に暮らす子ども達 ②更生施設・昼食の様子 ③勉強する様子



できない家庭も多く、子どもたちの健やかな成長が妨げられています。

#### 4. 気候変動の影響

ケニアは気候変動の影響を大きく受けており、雨季と乾季のサイクルが崩れ、干ばつや洪水が発生しています。国内農業生産量が減少し、食料不足や物価の高騰が深刻化しています。

これらの課題に対し、モヨ・チルドレン・センターは以下のような活動を行っています。

#### 1. 児童養護施設の運営

薬物やアルコール依存の親を持つ子どもや、親を亡くした子ども、虐待を受けた子どもなど、居場所がなく路上で生活していた子どもを受け入れ、安全で安心できる生活環境を提供しています。衣食住を提供し、学校に通い、ひとつの家族のように和気藹々と過ごし、安心できる居場所づくりをしています。現在は20名の子どもが施設に暮らしています。

#### 2. 薬物使用歴のある子どもの更生施設

経済的な困窮や虐待によって家庭に居場所を失った子どもは路上で生活するようになります。路上生活では、空腹や眠気、孤独を埋めるために、シンナーなどの薬物を使用するようになる子どもが多くいます。食べ物を買うよりも安価に

手に入るシンナーを使用することによって、路上生活でのマイナスな感情を埋めるように薬物に溺れていきます。そんな子ども達を対象にカウンセリングやりハビリテーションプログラムを提供しています。現在は16名の子どもが施設に暮らしています。

#### 3. 給食支援

家庭の経済的事情で十分なご飯を食べられない子どもを対象として、公立小学校で34人分の給食を無料で提供しています。空腹を満たし、勉強や遊びにも励めるようになるだけでなく、「ご飯を食べられるから学校にいこう」と、毎日学校に通う強いきっかけとなり、出席率向上に繋がっています。

#### 4. 学費支援

成績優秀で、学ぶ意欲も、将来の夢もあるのにも関わらず、経済的な理由で学校に通えない子ども7名に対して、返済不要の奨学金制度を設けています。学期ごとに評価面談を行い、意欲、成績、就学および生活態度などを踏まえて、学費支援の条件を満たしているのかを評価し、支援の継続を検討しています。

小さなNGOですが、子ども達が「当たり前毎日」を送ることができるようこれからもモヨを続けてまいります。

しかし、モヨは今、財政的な危機に直面しています。原因は「円安」「ケニアの教育過程の変更による学費増加」「物価高騰」です。その中でも、大きな原因是「円安」です。日本円で寄付をいただき、現地通貨で活動費を支払っているモヨにとって、円安は大きな打撃です。数年前は、100万円のご寄付をいただいたとしたら100万ksh(ケニアシリング)を現地で使えていたものが今は86万kshしか使えない状況。使えるお金が14万kshも減っています。14万kshは、更生施設に暮らす子どもの約2ヶ月分の食費に相当します。そして、円安・物価高騰は一時的なものではなく、今後も続いていると予想されます。活動を続けていくために皆様のご協力・ご支援が必要不可欠です。モヨの子ども達に心を寄せてくださる方がいらっしゃいましたら、どうかご支援をお願いいたします。



マンスリーサポーターのご登録をお願いいたします。